**田島　正三 （たじま・しょうぞう）**

**１、プロフィール**

歌人。口語短歌を中心に、詩・小説・エッセイ、新短歌に関する評論などを発表、三戸短歌会を結成した。

＜生没＞

1907（明治40）年７月23日 ～ 1970（昭和45）年８月12日

＜代表作＞

『田島正三遺稿集』

＜青森との関わり＞

三戸町の生まれ。青森商業学校卒業。青森県産業（農・商）界の要職につきながら文学活動を続けた。

**２、作家解説**

明治40年７月23日、三戸郡三戸町に生まれる。父田島三太郎は糸商・青果物商を営み、県会議員などを勤めた地方の名士である。

大正９年三戸尋常高等小学校卒業後、県立青森商業学校に入学。新卒の教員として赴任していた横山武夫と出会う。庭球部の主将で成績優秀な正三は、福島高等商業学校に進学する。しかし肺結核にかかり、入院加療を続けたものの思わしくなく、中途退学せざるを得なくなる。この時の闘病生活、挫折が文学にめざめる大きな契機となった。また、叔父である俳人北村烏城や母正子の影響も少なからずあった。田島正像の名でガリ版誌「エンジュ」に短歌、俳句を発表し始めたのは21歳の時である。

昭和３年９月、千葉県に転地療養する。アナ－キズム短歌を宣言していた西村陽吉主宰の第二次「芸術と自由」に参加、口語短歌を発表していく。また詩や小説の創作も始め、昭和５年１月には竹内俊吉選「サンデ－東奥」懸賞小説に「犬殺し」が入選している。

４月に帰省した正三は家業を手伝いながら、「創生時代」「座標」「短歌創造」など数種の同人誌に参加、口語短歌、エッセイ、評論などを意欲的に発表していった。「定量性論考－アナルキズム短歌方法論の一節」を昭和７年２月「サンデ－東奥」に発表。権力否定をテ－マとして、ユ－モア、批評精神、人間味豊かな作品を率直にのびやかに創作していった。昭和９年１月、「三戸短歌会」を結成する。

昭和13年31歳で青森県蚕糸商組合理事長に就任したのをはじめとして、三戸中央青果ＫＫ社長、三戸町議会副議長など数々の要職につき、地域社会、産業発展に貢献を続けた。

昭和41年小説「ヘンタ町葬記］で文学活動を再開。還暦を迎えた昭和42年、第三次「芸術と自由」同人となり地域文化振興と新短歌創作に意欲的に取り組んでいく。しかし３年後の昭和45年８月12日、63歳で没する。最後の作品は短歌10首「山びこに憶う」（「芸術と自由」38　昭和45年７月）であった。

**３、資料紹介**

〇『田島正三遺稿集』

図書

1971（昭和46）年８月12日

190mm×138mm

短歌を主に各時代の代表作を収録している。「芸術と自由Ⅰ」（昭和３～５）140首、「創生時代」（昭和５～９）88首、「芸術と自由Ⅱ」（昭和41～45）143首。小説１、詩・エッセイ５篇。竹内俊吉らによる追憶文５篇、年譜。編集川崎むつを、発行田島南江子。167頁。